

市制施行 65 周年記念パネルディスカッション 発言録



○小林 真理 (コーディネーター)

皆様、こんにちは。私は本日このコーディネートさせていただきます
東京大学の小林でございます。よろしくお願いします。(拍手)

今日パネリストに来ていただいている方は皆さん、改めてご紹介をする
必要はないかもしれない大変著名な方々ばかりです。時間の都合もござい
ますので、こちらのパネルディスカッションのパネリストのご経歴等をご

覧いただければと思います。

今日は市制 65 周年ということで、おめでとうございます。私自身も、両親が吉祥寺東町に住
み出したのが昭和 39 年でございます、そういうことを言っていると自分の年齢がバレてしま
うのでちょっと怖いのですけれども、それ以降、武蔵野に住んでおります。結婚した後も吉祥寺
東町に住んでいますので、もう四十数年ということになります。

本日は、この武蔵野市にかかわりのある皆様に武蔵野市の魅力をそれぞれに語っていただきな
がら、先ほど市長のほうからもありましたけれども、これから武蔵野市がどうなっていってほし
いか、あるいは今の武蔵野市の良さをどう継続していけるかをそれぞれの方々からお話ししてい
ただこうと思っています。よろしくお願いします。

まず、こちらに書いてあることは書いてあることとして、パネリストの方々に、この武蔵野市
との関わりをそれぞれお話しいただければと思います。井形さんのほうから回していきますので、
よろしくお願いします。

○井形 慶子 (パネリスト)

皆様、こんにちは。井形慶子です。よろしくお願いします。

私は、武蔵野市近郊のエリアも含めて、もう 20 年近く住んでおります。
そして、私がなぜこの吉祥寺に住み続けているかという理由なんですけれ
ども、非常に動機が不純で、大したお話ではないのです。以前、私は実は
千川上水の近く、練馬区関町のほうに住んでおったのですけれども、この



武蔵野市の、特に北町のエリアは、劇場とか図書館とか、個人の方が老朽家屋を改装してなさっ
ている、大変好きなインド料理レストランがあったものですから、そういうところに囲まれて、
年をとって 70 歳、80 歳になっても自分の足で歩いていけるところに図書館があったり、レスト
ランがあるのはいいなということと、正直、吉祥寺アドレスへの、やはり住んでみないとわから

ない何か強い憧れがあって、引っ越してまいりました。

そして、私が今までこの吉祥寺に住んで心に残っていることと言えば、5年前でしょうか、ロンロンがアトレに変わったとき。あのときに実は私は大変ショックで、寂しい思いをしました。といいますのも、私は吉祥寺から電車に乗って通勤しているのですけれども、ロンロンの1階に生鮮3店が入っておりまして、これはエッセーでも書いたんですが、八百屋さんがありました。今ももちろんありますけれども、あそこに朝から晩まで「いらっしやい、いらっしやい」とずっとかけ声をかけて、野菜の陳列をやっているおじさんがいた。通勤の行き帰り、嫌なこととか、自分で具合が悪いときとかいろいろあるときに、あのおじさんが「いらっしやい、いらっしやい」と朝から晩までずっと言っている姿を見て、「ああ、私も今日も一日頑張って働こう」と思って電車に乗った記憶があったんです。それが急になくなりまして、実は「おじさんは一体どこに行ったんですか」ということを八百屋さんに聞きに行ったんですね。そうしたら、渋谷のお店に移転になったと言われました。ところが、私と同じように、たくさんの市民の方が、あの「いらっしやいませ」のおじさんは今、一体どこに行ったんだと聞きに来ていると聞いて、そのとき不覚にも私、泣いてしまいました。ああ、これがやっぱり吉祥寺の人たち、武蔵野市の人たちの武蔵野人気質なのかなと思いました。おじさんに帰ってきていただけるように直接お手紙を書いたり、新聞に投書したり、いろいろしたんですけれども、吉祥寺はいい思い出を残して、ご引退したいということでした。

○小林 私もおじさんのことをよく覚えているので、今ちょっと、ウツときてしまいました。

私もロンロンがアトレになったときに一番悲しかったのは、皆さんはご存じかどうかかわからないですけれども、ロンロンには、ロンロンの歌があったんです。今でも私は歌えるんですけれども、その歌が流れなくなったことにすごくショックを受けまして、アトレになったときに、アトレのホームページから、「あのロンロンの歌はどうなったんでしょうか」、そういう投書をしたことを思い出してしまいました。

では、小川さん、いかがですか。

○小川 希（パネリスト）

僕は、東町でアートセンターOngoing（オン ゴーイング）というギャラリーをやっています。もともと中高が成蹊だったということもあって、吉祥寺というか武蔵野は20年以上関わってまして、実際に今も東町に住んでいます。娘が2人いるんですけれども、武蔵野市立南保育園でお世話になっていますので、今日は園長先生とか先生も来ていらして、ちょっと



緊張しているんです。僕がどういう仕事をやっているとか多分全然知らないと思うので。（笑）僕はいつも子どもを送り迎えしていて、朝は髪ボサボサで行っているんです。ふだんはそういうギャラリーをやっている関係で、展覧会をプロデュースするみたいなことをいろいろやっています。

移り住んだ理由は、もともと実家は小金井だったんですけれども、自分がそういうアーティストを紹介する仕事をしていることもあって、ギャラリーをどこにつくるかをすごく考えたときに、都心からも来れる西側のぎりぎり吉祥寺かなというのがあった。逆に、アーティストたちはここより西に住んでいる人たちがたくさんいて、それはアトリエと言われる制作する場所が、ここから西に行くと、どんどん広くて安くなるということがある。作家も来れて、一般の人たちも来れる、その最小公倍数というか、ちょうど真ん中の線が吉祥寺だったということもあって、吉祥寺でギャラリーを開いて、いろいろ活動をやっています。

これまでにどんな思い出があるかということなんですけれども、僕のやっているギャラリーは、**Ongoing** という名前です。**Ongoing** というのは「現在進行形」という意味を持ってまして、巨匠とか有名な人を紹介するというよりは、現在進行形で活躍するであろう若い作家たちをどんどん紹介しています。その流れで、東京都から「この地域全体で君がやっている活動をまちに広げてくれないか」という依頼を受けまして、今日と明日もちょうど井の頭公園で大きいイベントをやっています。パルコの屋上を使った展覧会をやったり、サンロードの中で展示をやらせてもらったり、ハーモニカ横町の一角で展示をやったりとか、そういう形で、思い出というよりは、現在進行形でまちを舞台に日々いろいろ展開をしているという感じです。

○**小林** ちなみに、今日やっている井の頭公園でのイベントはどんなものか、せっかくですからご紹介いただけますか。

○**小川** チラシを皆さんにお配りするタイミングがなくて、今日持ってきたんです。もし興味があれば、入り口のところに置いてあります。**TERATOTERA**（テラトテラ）祭りというのをやっていて、これは高円寺、吉祥寺、国分寺と、全部最後に「寺」がつくところを結ぶ。あと、**TERA** は惑星とか生命とかいう意味もあるので、人と人をアートで結ぶみたいな活動をやっています。井の頭公園の池よりももっと奥、ジブリのほうに歩いていく途中で森があるんですけれども、その森の中で、今日、明日、野外展をやっています。大きいイベントとしては、「いせや公園店」という老舗の焼き鳥屋さんが、つい最近、耐震性の問題で取り壊しになったんですけれども、そのときに出た廃材をいただいて、1分の1スケールでそのまま組み立てて、「いせや」をもう一回復活させ、それを引き興すというイベントをやっています。張りぼてなんですけれども、

それを今、井の頭の 400 メートルグラウンドがある西園と呼ばれる大きなところで作って、それを 200~300 人で引き興す。それで何なんだという感じなんですけれども、(笑) そういうアート活動というか、そこでみんなが一体になって力を合わせて引き興して、「いせや」を偲ぶじゃないですけれども、明日は、引き興したものをさらに引き倒すというイベントを 3時からやっています。もし興味があったら。ほかに音楽のコンサートもやったり、いろいろしています。

○小林 現代アートって、何か分かりにくかったりしますけれども、人と人を結びつける力がすごくあって、面白いですね。小川さんところの **Ongoing** って、ちょうど私が住んでいるところの近くの四軒寺から女子大通りへ入っていったところにあるんですけれども、やっている展示も面白いですし、あそこの食事もすごく美味しかったです。皆さん、ぜひ一度ご来場ください。と、私が言うのも変ですけども。

それでは、美内さん、お願いします。



○美内 すずえ (パネリスト)

こんにちは、美内すずえです。よろしくお願い致します。

私は、吉祥寺に住んで、住んでですよ、34 年になります。通勤をする仕事ではないので、まちの移り変わりを 34 年間、ずっと見てまいりました。

吉祥寺に引っ越した理由は、それまで 2 年ほど千葉に居たんですけれども、そこよりもうちょっと広いところが欲しいということで、出版社の編集さんに吉祥寺の不動産屋さんを紹介していただいて、東町のほうに 1 年住みました。何で 1 年かという、1 年の間に吉祥寺が気に入ってしまって、その翌年に吉祥寺のある場所に家を建てて移り住んで、全部合わせて 34 年になったんです。

吉祥寺がとても好きになった理由は、まず、交通の便がとても良くて、出版社の編集さんも来やすい場所でした。それから、漫画のアイデアを練るのに——私、漫画家で『ガラスの仮面』とかいう作品を書いております——落ちつける喫茶店がとてもたくさんあったんです。朝の 7 時半オープン、夜の 11 時半終業の喫茶店に丸一日いました。そこでアイデアを練っていましたから、相当長い時間のんびりさせてくれた、そんな雰囲気のある喫茶店も多かったんです。残念ながら、私みたいな客がいるので、そこはつぶれちゃったんですけれどもね。(笑) 商売上がったんですよ。

とにかくアイデアを練るのにふさわしい喫茶店とかお店がとてもたくさんあったことと、吉祥寺のまちが、もちろん商店街もあるんですけども、井の頭公園もあり、住宅街に入ると、ちょっとかわいい個性的なお店があったりして、なかなか奥が深いんです。とても好きになったも

のですから、『ガラスの仮面』という、これまた 36 年ぐらい続いている漫画の連載をやっているんですが、その中で吉祥寺を登場させました。演劇を目指す女の子が、仲間たちと一緒に井の頭公園の野外音楽堂を使って「真夏の夜の夢」をやるというシーンも書きました。

実は、吉祥寺をテーマにした短編集のアイデアもあるんですけども、今、長編が多いものですから、それが終わってからじっくり書きたいと思っております。きっと面白いドラマがたくさんあるなという感じを受けております。

○小林 その短編のほうもすごく期待しちゃいますね。

○美内 ありがとうございます。吉祥寺の小さなまちでの色んな出会いとか、そういう心が温かくなるような作品を書いていきたいなと思っているんです。

○小林 では、三浦さん、お願いします。

○三浦 展（パネリスト）

三浦です。よろしくお願い致します。私は今はフリーで活動しておるのですが、13 年前までは普通にサラリーマンでして、吉祥寺南町に引っ越してきたのが、ちょうど 24 年前の 11 月です。今は東町で、ふだんもその辺におります。



さっきロンロンの話があったのですが、大学が国立だったもので、住んでいたのは小金井なのです。吉祥寺というのはやっぱり有名でしたので、35 年前に小金井から吉祥寺に来て、今はないんですけどもレコード屋さんでレコードをいっぱい買っちゃったら、生活費がなくなっちゃって、2 週間 3000 円で暮らしたという思い出があります。

あと、当時のロンロンの弘栄堂書店はすごい本屋でしたね。人文社会系のありとあらゆる全集が揃っていて、マルクス、エンゲルス、ヘーゲルからカントからショーペンハウエルから、シェリングとかよく知らないような哲学者とか、エーッ、こんな本を読まないといけないのかなと絶望した覚えがございます。私は新潟から来たんですけども、新潟にはあり得ない東京の知的水準といいますか文化水準の凄さに打ちのめされたというのが 35 年前の吉祥寺体験です。

24 年前に住んでからは、会社が渋谷だったものですから、渋谷に通いやすいということで、それ以前は東急沿線にいたのですが、東急は高いので、永福町あたりでいいやと思ったのが何となく吉祥寺になりまして、南町に住みました。子どもを 2 人作りまして、南町は公園に近いので、子どもを連れてすぐ公園に散歩に行ける。吉祥寺はもちろん家賃が高いのですが、子育てするにはいい。ボートにも乗れますし、動物園もありますしということで、私も南保育園と三小に子ども 2 人をやりまして、育ててきたということでございます。

最初は、サラリーマンで子どももいませんでしたから、自宅と駅の行ったり来たりで終わるんです。だから、吉祥寺に住んでいると言っても、実はそんなにメリットを感じずに生きてきた。ところが、子どもが出来ますと、保育園に預けます。それまでコミセンがあるのを知らなかったのです。前進座のあたりに何かあるらしいみたいなことで行ってみたいとしていると、だんだん地域とつながりが出来てきますし、当然、お父さん、お母さんともつながりが出来る。

それから、脱サラしまして、2000年から吉祥寺本町のほうに事務所を持ったのです。事務所というほどでもないんですけども、朝から夜まで中道通りあたりをうろうろする生活になります。週に一遍、ハモニカキッチンの手塚さんの顔を見たり、月に一遍ぐらいは碁図かずおさんの顔を見たりという暮らしをしていた。昼間暮らすというのは全然違う。サラリーマンで住んでいると、しょせんベッドタウンなんですけれども、昼間からずっと暮らしていると、すごく愛着が変わってまいりました。そんなことで、吉祥寺はなぜ住みやすいか、あるいは働きやすいということ、今から5年前に『吉祥寺スタイル』という本にまとめたりしてまいりました。こういう経歴でございます。

○小林 『吉祥寺スタイル』は皆さん、もうお読みになられたかしら。私もあれが出たときにすぐに買いました。

では、三宅さん、重鎮という感じですけども、よろしくお願いします。



○三宅 哲夫（パネリスト）

三宅哲夫でございます。どうぞよろしくお願い致します。

パンフレットに「武蔵野市商店会連合会顧問」という肩書がありましたが、私も自分で忘れてしまっているような古い肩書で、使ったことがありませんでしたので、後でもし時間があれば、武蔵野商店会連合会の話 ちょっとしたいと思います。

私は、武蔵野で生まれ、武蔵野で育ち、お墓が吉祥寺のど真ん中にありまして、いずれ武蔵野の土に返ってしまうというキャッチフレーズで選挙に出たらいいかなと思ったんですが、実は武蔵野市の生まれではございません。宮城県仙台市で生まれました。それは昭和20年3月のことでもあります。東京の大空襲が昭和20年3月10日。武蔵野は、ご存じのように中島飛行機の武蔵野製作所がありまして、爆撃をされました。たくさんの犠牲者が出ました。東京大空襲は10万人、武蔵野では中島飛行機そのものものでは200人ぐらいの殉職者がいたと聞いております。

私の家は強制疎開という措置をとられました。「学童疎開」とか「疎開」という言葉は聞いたことがあると思いますが、「強制疎開」という言葉は余り使っていないのかな。年代がもう全然

違いますのでね。私たちの家は、ある日突然、ここからここまで全部強制取り壊し。これは全国の軍需工場の際とか線路際、駅前周辺であったことであります。下手すると 10 日前に通告を受けて、即刻、家を取り壊しになります。これは防火帯をつくるためなのですが、私は、父や母が商売をやっていた場所、現在パルコのはす向かいにあります三宅という、家具とインテリア雑貨をやっている店で生活をしていましたが、ある日、突然「ここは全部取り壊し」。駅、線路際、全部取り壊しの強制疎開という措置をとられまして、姉も妹も弟も、森本病院の隣の、今はございませんけれども吉祥寺の樋口産婦人科で生まれましたので、本来だったら私もそこで生まれる予定だったのですが、つてを頼って仙台に疎開をして、日赤で生まれる。戦後すぐ帰ってきました、再建をいたしました。ですから、私は昭和 20 年、ほとんど全てを吉祥寺から一步も出たことがない。他のまちを知らない、小学校も中学校も吉祥寺だけ、武蔵野だけ。高校、大学は通学を致しましたが、通勤したことがない。まちの中しか知らないという非常に残念な人間でありますので、よろしくお願ひ致します。

○小林 生き字引のような三宅さんにこれからもお話ししていただこうと思っています。

皆さんは、その武蔵野にずっと長く住んでいらっしゃるけれども、この中でどんなふうに楽しんでいらっしゃるかというお話をこれからお聞きしようと思います。

実は私は、たまたま大学の教員になりましたけれども、子どものころから、何となくなんですが、本屋の多いことが好きだったんですね。先ほど弘栄堂の話が出ましたけれども、私は弘栄堂のブックカバーが好きだったのです。ロンロンがなくなって、弘栄堂は鉄道弘済会の関係でやっていた本屋だったらしいのですけれども、撤退しちゃって一番寂しかったのは、あのブックカバーがなくなってしまったことなんです。ご存じない方はちょっとわからないかと思うので申し上げますと、ちょっと渋目で、今でも私、とってあたりします。

ここにいらっしゃる皆さんはきっと「文化人」なんていう言葉を使ったら怒る方々ばかりだと承知で言うてしまうのですけれども、比較的文化人と言われる方々がすごく多く住んでいらっしゃるという感じが聞いていて、私が子どもの頃から、大学の先生が多いんだよとか、作家の人が多いんだよという感じがあります。実際、私の実家のすぐそばに著名な政治学者の丸山眞男さんが住んでいたりしましたし、私が大学教員になって、ちょっとプライバシーに関わっちゃうけれども、私の所属している東大の文学部の教員百何名のうちの 5 名は武蔵野市に住んでいるんです。昨日、松浦寿輝さんが紫綬褒章を取られたということでしたけれども、「武蔵野市在住」となっていましたので、東大全体に広げたら、相当な数の方が住んでいらっしゃるんじゃないか。そういうことが関係して本屋さんが多いのかなと思って、本屋さんがあることをむしろ誇りに思っていたり

しています。

皆さんは、先ほど井の頭公園などを訪れたりとか、喫茶店の話などもされましたけれども、現在、武蔵野市全体に、吉祥寺だけじゃないですよ、どんなふうに愛着を感じながら楽しんでいらっしゃるか、それぞれにお話しいただければと思います。

○井形 吉祥寺は、住みたいまちの首位に7年連続で輝いている全国区のまちなんですけれども、昔は地方に行くと、原宿とか青山とかを皆さんよく知っていらした。最近では「吉祥寺に住んでいます」と言うのとエーッと言われて、色んな人たちが吉祥寺を知るようになったと思うんですが、どっちかという、格好いいとか、おしゃれとか、面白いお店が多いとか、雑誌が啓蒙していったような側面が割と多いと思うんです。実は私、来週、『東京吉祥寺田舎暮らし』という本を出すんですが、吉祥寺のことを「村」と呼んでいまして、吉祥寺に住んでいる方を「村人」と書いて、田舎暮らしを吉祥寺で楽しんでおります。具体的には、たくさんある農家に通って、とれたての旬のお野菜を買ってきたり、井の頭公園なんかは土日になると人が大変多いもんですから、ちょっと離れた上水路ですとか、成蹊大学の並木道の裏のほうを歩いてみたりとか、そういうことをして楽しんでいます。

ほかのまちと吉祥寺を比べてのことは後ほどお話ししたいんですが、実はなぜ私が吉祥寺を「村」と言うかという、日本で「村」は、「村八分」とかいう言葉にもありますように、余りいい意味では使われていないかなと思うんです。ところが、私はイギリスと深いかわりがあり、日本とイギリスを行ったり来たりしていまして、4年前に、ロンドン北部のハムステッドという、吉祥寺にすごく似ているエリアに自分の家を持ちました。そこは住みたいまちナンバーワン英国版みたいなところで、大きな公園もあって、井の頭公園の池みたいな感じの池が全部で30個ぐらいある。1つ違うのは、30個の池のうちの5つが、動物も含めて人が365日泳げるようになっているんです。寒中水泳もやっている高齢者が多い。そして、吉祥寺と一番似ているのが、文化人が大変多く住んでいること。古くはフロイト、キーツ、夏目漱石、ナイチンゲールといった方々で、私の家のすぐ近くにはピーター・オトゥールさんが住んでいらしたとか、裏はハリー・ポッターの女の子、エマ・ワトソンさんとか、道を歩けばカズオ・イシグロがいたりというエリアが吉祥寺にすごく似ている。そこが一番人気の理由のあかしとして「ハムステッド」ではなくて「ハムステッド・ビレッジ」と呼ばれるんです。「村」という定義が、日本では閉鎖的なコミュニティをあらわすんですが、英国では、もっと開かれたコミュニティ、温かな人とのつながりみたいなものを表す。ロンドンには、今、ハムステッド・ビレッジのほかに、チェズウィックもビレッジと呼ばれていまして、「村」と呼ばれているところは不動産など資産価値も

物すごく高いですし、みんなが本当に住みたいと思うエリアになっています。

話がちょっと脱線してしまったのですけれども、私は吉祥寺の中に「村」とか「村人」の要素を見つけて、今にも潰れそうなお店にわざわざ行っては、本当はスーパーで買えば安いんですけども、高い物を一生懸命買う。ちょっとおごった言い方ですけども買い支えるという感覚でしょうか、それを自分ですごく楽しんでいます。

○小林 なんか素敵だなと思ったのです。というのは、私、ここで仕事をしているというよりは、地方の各自治体に行って、文化を振興したり、文化でまちづくりをすることを研究しているんです。よく「小林さんはどこご出身ですか」と聞かれて、「私は東京出身で、東京育ちなんです」と言いますと、何となく「残念だね」という反応が返ってくるわけです。「田舎がないんだ」みたいな感じで向こうに受けとめられるんですね。地方に行くと、東京の殺伐とした砂漠のように思われる方が多いので、そういう受けとめ方をされるんだと思うんですけども、私自身、ここがすごく好きですし、ここを本当のふるさとに思っていますし、それこそここで住みたいみたいに思っている中で、私自身が、井形さんのようにコミュニティとかで触れ合っているわけではありませんけれども、何か温かいものがあるということをお聞きするにつけ、ああ、やっぱり私はそういうところが好きなのかなと、今ちょっとジーンと感ずいてしまいました。

○小川 僕は仕事柄、大規模な展覧会を企画することが多くて、そのときに僕のやっているプロジェクトが「TERATOTERA」なので、ボランティアの人たちをテラッコと呼んで募集しているのです。テラッコは吉祥寺が中心となっていることで、ボランティアの集まる率が、ほかの地域と全然違う。物すごい人数が集まってきて、しかもその人たちは非常に有能な方たちが多いというか、僕よりもすごくできる人たちがたくさん集まってきている。それは武蔵野市に引力とか魅力とかがすごくあるので、文化的なアンテナを張っている人がすごく興味を持って集まりやすいのかなというところで、武蔵野市の見えざる力みたいなものをいつも感じたりするのです。ボランティアという、大学生とかの学生が中心なのかなと思うと全然そうでもなくて、上は定年を過ぎた人もいますし、現役の新聞記者さんもいたりして、そういう普段自分がやっている仕事とは別に、文化に対して無償で何か地域貢献をしたいというか地域と関わりたいという人たちが集まってくるところは面白いというか、武蔵野市の力を非常に感じたりしますね。

○小林 今の見えざる力って、小川さん風に言うとは何だと思えますか。

○小川 恐らく、来た人たち同士で、ある程度の文化のアンテナの張り方が一緒というか、クオリティーが結構高いという言い方は悪いかもしれませんが、共通言語で、文化的な話がすぐ通じ合える、そういう人たちが集まりやすいんです。だから、全く文化に興味がないとか、僕

が「『いせや』を引き興す」とか言っても「何なの、それ」じゃなくて「何かおもしろそうですね」というところで、みんなすぐ「やりましょう、やりましょう」と言ってくれるというか。

○**小林** それはどういう土壌が育まれているのかがすごく不思議な気がします。

○**小川** そうですね。皆さんのお話にあるように、歴史の中で本屋さんがたくさんあったりとか、映画館も、ほかと比べていいのがずっと続いたりとか、そういうのがあるんでしょうね。

○**小林** 私もそんなふうに思ったりしています。

○**美内** 先ほどお二方からロンロンの話が出て、おお、そうだそうだと。私も、ロンロンがアトレに切り替わる時に、すごくショックを受けたうちの1人。何よりもショックは、先ほどおっしゃった本屋が充実していたんです。私、色んな資料とかはその本屋さんによく行っていたものですから、あれがなくなるのかとか、馴染みのお店がどうなっちゃうんだろうとかいうのがすごく気になって、いまだにちょっと尾を引いているんです。

そのほかにも、吉祥寺に集まるお店は、愛着が湧くような店がとても多かったんです。「多かった」という過去形はとても申し訳ないんですけども、私の好きだったお店がたくさんなくなって新しくなっていたものですから。昔はクラシックだけを聞かせるこだわりの店とか、客が入っていくと、コーヒーを持ってきてもコトンという音も立てられないぐらいシーンとしてクラシックを聞いている「こんつえと」というお店があったのです。そこもアイデアを練るのにとてもよくて、よく行っていたんです。それから、ジャズばかり聞かせるお店。ジャズのライブハウスはまだ残っていますけれども、私の好きだったお店はもうなくなってしまった。先ほど文化とおっしゃったんですけども、多分1つの文化が生まれると、それが好きな人たちが集まってきて、大きな文化になっていく、そういうのがあるような気がします。

私は、先ほども言いましたように、引っ越してきたのは34年前なんです。その34年の間に、吉祥寺は漫画家がとても増えました。今、各出版社で表看板になっている作家さんはたくさんいます。つられてそのアシスタントさんもやってくるもんですから、吉祥寺に憧れを持って、デビューしてから吉祥寺に住みたい、住んじゃったというアシスタントさんたちもいるのです。

15~16年前、吉祥寺本町二丁目にあった喫茶店に行っただけです。そこに、一時、私の作品を手伝ってくれていた女性の漫画家さんがいたんです。「やあやあ、久しぶり」と顔を合わせて、「どうしているの」と言ったら、「先生、私、吉祥寺の南町に引っ越しました」と言う。「ああ、そう、南町にいるんだ。何で今ここにいるの」と聞いたら、ここのお店が気に入って、しかもその吉祥寺本町二丁目にあったお店に仲間たちがたくさんいると言う。「エッ？」と聞いたら、「先生、知っていますか。吉祥寺本町二丁目だけで新人の少女漫画家さんが4人もいますよ。」

これは物凄い確率ですよ」とおっしゃった。

それから、私はサンロードの一角にあるマンションで、割に最近まで、20年ぐらい仕事をしていたのです。自宅は同じ吉祥寺の違うところにあるんですけども。私の仕事場は6階で、8階か何かに少年誌の作家さんが引っ越してこられて、大分長いことやっていたのです。「北斗の拳」の作者さんです。その方が2年くらいいらっしゃって、やはり同じ吉祥寺の別のところに引っ越された。それを皮切りに、続々と色んな作家さんが集まって、しかも面白いことに、みんな作品の中に吉祥寺というまちを書くんです。私もなぜか吉祥寺に入ってから、吉祥寺というまちを書きたくなって書きました。吉祥寺を舞台にして書いている作家さんがほかにもいらっしゃいます。不思議な吸引力というか魅力というか、それが何なのか具体的に分析せよと言われてもわからないんですけども、類が類を呼ぶとか、文化が文化を呼ぶ、そんな感じで広がっているような気がします。これからもっと色んな漫画家さんの作品の中に吉祥寺のまちがあちこち出てくるんじゃないかなと思っています。

○小林 ちなみに、漫画家さんが集まってくるのは、アイデアが浮かびやすいまちだからなんですかね。

○美内 それはちょっとわからないんですが、色んなものが充実しているせいだと思うんです。例えば、本屋さんがあれば画材のユザワヤさんもある。そこに行けば大概の漫画の画材がそろうとか、それだけじゃなくて、人が集まりやすいところがたくさんあるんです。アイデアは喫茶店で練る人もいれば、自宅で練る人もいるし、井の頭公園を散歩しながら練る人もいるので一概には言えないんですけども、吉祥寺というまちが色んな顔を持っているんです。

それから、私はウインドーショッピングが大好きなんですけれども、例えばカエルのグッズの専門店、エッ、こんなのができたんだとかね。そういうふうにかざりを持って小さなお店をやっていたら、そのこだわりの精神に触れるのが何か楽しいというところがありますね。新しくできたお店の店主のこだわりとか、小さいアクセサリ屋さんなんだけれども凝ったものを置いてあるとか、そういうところからファンができてきて、広がっていくんじゃないかなという印象を持っています。

○小林 まさにその辺の吉祥寺とか武蔵野の吸引力を分析されているのが三浦さんだと思うんですけども、そのあたりも含めて、いかがでしょうか。

○三浦 辛口で鳴らしている私ですので、少し辛口の話もします。

僕は6年前に事務所を吉祥寺から西荻に移しちゃったのです。もうちょっと広いところだと家賃が高いから、西荻なら少し安いかなという理由ですけども、西荻も好きなもので、そちらに

移してしまったのです。西荻も、今おっしゃったような、個人がこだわった店がどんどんできていて、逆に言うと、そういう店ばかりなんです。吉祥寺は全国チェーン店とか、大きな居酒屋とかもいっぱいあるので、もしかするとこだわりの店が埋没して見えるという状況にあると思うんです。



年齢的な問題もあるけれども、今、私が吉祥寺に来ると、人が多くて疲れちゃうとか、ある意味、これは 25 年ぐらい前の渋谷の状況になっていると思います。3 番目のテーマを先取ってしまいますと、もともと私はパルコに勤めていたので、渋谷の全盛期から衰退期までを知っておりますが、ヤバい状況もあるぞという気がしています。何でもあるんだけど、1 個 1 個が埋没していくような感覚もあって、今まで話されていたような、まさに文化があふれ出している雰囲気だけを味わおうとすると西荻のほうがいいぞとか、アーティストが自由に勝手にやっている雰囲気を味わいたければ高円寺のほうがいいぞという、大げさに言うと頭脳の流出が起きているのではないかと。吉祥寺の半径 300 メートルあたりにお店を出そうとすると大変お金がかかるわけです。だから、お金はないけれども才能のある人は出にくい。小川さんも駅から 600 メートルぐらいのところに店があるということで、この辺はちょっと危機感を感じたほうがいい。

もう 1 つは、先ほど井形さんがおっしゃったように、武蔵野という視点で見ると、自然です。井の頭公園はもちろんですけども、私も自転車でさっと走って、吉祥寺から玉川上水経由で善福寺川も回ってから西荻に通勤したりしているのです。これはすばらしい資源なんです。千川上水もすばらしい。よくジョギングをされている方がいますけれども、実はこの千川上水と玉川上水、それから善福寺池に囲まれたパラダイスのようなところが吉祥寺本町、東町、南町、北町です。

我々も、例えば子育てで忙しいときは、千川上水を歩いている暇も余りない。外から吉祥寺の雑貨屋さんを楽しみに来る人も、実はそんな遠くまでは知らないのです。しかし、この遠くの田舎、まさにビレッジ的なところも含めて吉祥寺を核とする武蔵野市の大きな資源であると思うん

です。

時代は今、単に都市的なもの、おしゃれなものを求めるだけではなくて、自然とか癒しとかいうものを求めていますから、それも含めて武蔵野市には資源があるということをこれからアピールしていったほうがいいんじゃないかなと思っています。

○**小林** 非常に重要な視点というか、この後にいろいろ問題点などをお聞きしようと思ったんですけども、先取りしてお話ししていただいたかと思います。その話は後でもう一回回ってくると思ってください。

○**三宅** 吉祥寺の話に限定をされちゃうんですが、私は基本的に「住めば都」。よそのまちに住んだことがない者のひがみみたいなもので、常に住めば都じゃないか。西荻でも高円寺でも阿佐ヶ谷でもいいよねと言うんですが、実際吉祥寺の中で商売をしていますと、本当に遠くから来るんですね。住所を書いていただくと、栃木、群馬とかいうところのお客さんなので、余りに遠いもんですから、たまに「何で吉祥寺に来たんですか」と聞くことがあります。「吉祥寺、ずっと来たかったんです。緑が多いし、お店がたくさんあって、面白いところですね」と表面的に言っていただくんですが、実際は武蔵野市はそんなに緑は多くないんです。井の頭公園の借景。井の頭公園はみんなよその行政区ですから、（笑）武蔵野市ということに限ると、そんなに多くないだろうと思うけれども、あのイメージはすごく大きい。

どんどん新しいお店ができるんです。「Hanako」という雑誌で吉祥寺特集をすると、今年1年間でオープンしたお店がほとんど載っているんですけども、これっていいことなのかなという事は、中で仕事をしている人間として非常に反省することがあります。多いときは月に3軒とか4軒お店が閉まる。そのかわり、また新しいお店ができる。そのことの繰り返しをやって、「どんどん変わっていきますね」と言われるんですが、中にいる私たちは、実は変わっていくさまが全くわからないんです。ほとんど自然として受けとめていきます。だから、ロンロンがアトレに変わったとき、物すごく残念だった。私も残念組のほうなんです。でも、そのことを異議ありと手を挙げるわけにいかないわけです。JRがやった駅ビルの方針に、そのままロンロンにしてくれとは言えない。「ロンロン、ロンロン」という歌を歌って、頭にはロンロンという名前が残っていて、私は今でもロンロンと言ってみんなに笑われるんです。「ロンロンで待ち合わせしようね」と言うと、「エッ、ロンロンなんかないですよ」と若い人にばかにされるんですけども、ずっと言ってきた名前。私はいまだに「伊勢丹前」とか「三浦屋の地下で」と、どうしても言っちゃうんです。何十年も三浦屋さんのあった後の靴屋さんの名前をいまだに覚え切れないのは、だんだん年をとってきた証拠でしょうけれども、まちが変わっていく様というのは、いいこ

となのか、将来だんだん下っていく途中なのか、これは非常に難しいことだと思っています。いいお店がたくさん消えていく。これは商人の生き様ですから、何とも言いがたいんです。「頑張っってやりなさいよ」なんて人様に言えません。だめだと思ったら新しいお店が入ってくる。

昔、サンロード商店街は駅前通りと言っていたんですけれども、あそこにバスが走っていたのを知っている方はごくわずかになってしまいました。大型バスが走っていたんです。トラックもタクシーも、みんな走っていました。あそこで交通事故で死んだ人は何人もおります。私の小学校5年のときの同級生も、バスにひかれて死にました。今度ヨドバシ（近鉄前）のところに道路ができて、すばらしいアーケードがサンロードにかかる。すばらしいお店ができるとか、1つ1つ変わっていくんですけれども、良くなったのか悪くなったのかは、将来的に誰が判定するのかわからないにしても、この変わり様をどうするのか。止めることができるのか、止めちゃいけないのかということで、仲間内にちょっと話をすることもあるんですが、いつも自分の中だけでどうしたらいいのかなと、『吉祥寺スタイル』という三浦さんの本も読んでいて、反省するんです。反省しても人様のことは言えません。これは行政にもなかなかできない。骨格はつくれますけれどもね。吉祥寺をどうするのか、そのことが武蔵野はどうなるんだということにも大きく関わってくるのかなと思っています。

○小林 これからということの話にすごく繋がってってしまうことなのかなと思います。確かに、住みたいまちに吉祥寺は7年連続1位だけれども、住んでよかったまちについては、残念ながら2位だか何だかになっちゃみたいなこと、私の住んでいる東町の九浦の家のところでも、私はちょっと行けなかったのですけれども、吉祥寺は本当に住んでいいまちなのかみたいな話が行われたりしているのです。

私自身も実際、西荻で飲んでます。西荻のほうがやっぱり落ちついて、昔からのいいお店があるんですね。吉祥寺はチェーン店みたいなものになっちゃっている中で、残念ながら昔ながらのお店がどんどん消えていっちゃうという印象を持っています。

ただ、先ほど三浦さんが自然のことをおっしゃった。確かに、善福寺公園は杉並区だし、井の頭公園は半分は三鷹市だし、小金井公園は小金井市だしみたいな形なんですけれども、私は最近、すごく驚いたことがありました。私は今、実家を建て替えることになって、この間解体をしました。更地にしたんです。父はまだ元気です、記憶していたことの中に井戸があったから、建てかえるときに気をつけたほうがいいよみたいな感じのことを言う。武蔵野市の方はご存じだと思いますけれども、上水道のほとんどは、地下水なんですよね。8割は富士山の伏流水なんです。そういう地下水をいろいろ調べて、今、その井戸を復元しようと思っているのです。私の住んで

いる吉祥寺東町は、7メートル掘れば地下水脈に当たって、それが富士山の伏流水ということなんです。実際、私の家の近くの本宿小学校のところには、災害用の井戸水が整備をされています。

さっき、私は色々な自治体に行くと言ったのですけれども、今、長野県の北アルプスのふもとのところにある自治体に関わっています。その市長さんが胸を張って「うちは上水道を特別に整備していないんです。全部地下水でやっています」とおっしゃったので、「ああ、すごいですね。だけど、私の住んでいる東京の武蔵野市というところも8割は富士山の伏流水なんですよ」と、ちょっと威張っちゃったりしたのです。都市部でこれだけの豊かな自然があるということをしごく大事にしていかなきゃいけないと思うし、私はそこに改めて愛着を感じたりしたわけです。

ただ、今度そういうような自然も含めて、お店のことも含めて、吉祥寺は住みたいまちだよ、武蔵野市はいいよねと言われて、大勢の人たちが来てくれるのは、商工業の発展みたいな部分からするととてもいいことだと思うんです。ちなみに私はサンロードにバスが通っていたのを覚えています。平和通りのところに卵屋さんがあったのも覚えています。では、住んでいいまちにこれから本当になっていけるのかというところが重要だし、今、市が65周年になって、吉祥寺も、三鷹から北も、武蔵境はプレイスができる、またすごく賑わったりしていますけれども、今後どうすればもっと良くなっていくのか。あるいは、美内さんはずっと見ていらっしゃいますが、失われてしまうと、復活するのは難しいのです。そうすると、これからの武蔵野市なり吉祥寺みたいなものが、私たちにとって本当に住みやすく楽しいまちになっていくためにはどういう点が大事なのか、どういうことを注文したり、期待したいのかをお話いただければと思います。

○井形 先ほどのお話の続きになるのですけれども、ここにいらっしゃる皆さんがおっしゃったように、私はロンロンが閉じて、伊勢丹が撤退してコピスにかわったときぐらいから、この吉祥寺には実はものすごく危機感を抱いています。急速にまちが変わっていくんじゃないかと思ったら、本当にいても立ってもいられなくなって、今日こちらにいらっしゃいます土屋前市長に連絡をして、このままではまずいのではないかとということで喫茶店でいろいろお話をしたことがあったんです。

私がまずいなと思った理由は幾つかあります。まず、大型の商業施設の中に、どこにでもあるようなお店、いわゆるチェーン店がどんどんどんどん入ってきて、アーケードの中はドラッグストアと安売りの靴屋さんとか携帯屋さんばかりで、土日になると人があふれ返っている。私の娘もずっと吉祥寺に住んでいるのですが、2年ぐらい前から、もう吉祥寺を出たいと言い始めてい

る。その理由を聞いてみると、雑誌で紹介されるお店が余りに多いので、ランチを食べに行くにも行列しないとイケないし、とにかく人混みが異常に多くて落ちつかないと言うんですね。そういう人たちが三鷹とか西荻に流れていつている。

それから、吉祥寺というのはすごく家賃が高いと思われているんですけども、その反面、高齢化が進んでいて、相続しなきゃいけないようないわゆる老朽物件、例えば、今、若い人が借りたくないワンルームマンションの類いとか、もうボロボロで業者もリフォームしないような老朽マンションが結構残っているんです。

私は数年前、リーマンショックの後だったんですけども、吉祥寺にあるメゾネット式の、本当にボロ家と言われるようなマンションを500万円で購入しまして、会社の従業員のための施設兼仕事部屋にしたのです。その本を出しましたら、あんなに高い吉祥寺に500万のマンションがあったのかという、まず不動産業界からの興味とか、国交省の人たちは「こういうものがブームになっているんですか」と聞きに来られましたし、物すごい反響があった。

今、私が考えていきたいと思っているのは、吉祥寺がプラスチックなまちになろうとしていること。例えば、ミッドセンチュリーの家具が置いてあるようなカフェに、60代、70代のおじいちゃん、おばあちゃんたちは入れないので、ツリーベンチの下に、三宅さんのお店の前にある木の周りに椅子がありますね、そういうところに腰かけてよく休まれている光景を見たときに、このまま吉祥寺が若者を取り込むような政策をしていくと、こういう富裕層、小金持ちの人たち、豊かな中高年層が吉祥寺にお金を落とさなくなるんじゃないか。美内先生も吉祥寺で買い支えていただいているのが、もしかしたら銀座とか新宿とか、違うエリアで買ったほうが、いいモノがもっといっぱいある、吉祥寺はどこに行っても同じようなモノしかないと思うようになるかもしれない。吉祥寺というのは海外生活経験されている方も大変多くて、珍しいお店、インディビジュアル（個人）ショップをすごく求めているのに、大型チェーンの波がドワーッと入ってきて、その勢いは今、止まらないんです。

それとともに新しいモノ好きの、雑誌を持った若者がどんどんやってくる。でも、そういう人たちは見ておしまい、申し訳ないんですけども、大したお金は落としていかない。そういう人たちに邪魔されて、本当にお金を持っている人たちがゆっくり買い物をしたり、ご飯を食べたりできる環境が壊れていつている。そして、私が朝、新聞を読みたいなんて思ってまちを歩いても、早朝あいているのはガストのようなお店だけで、やっぱり若い人たちが多くて、ちょっとうるさくて出てしまう。

だから、私たちはこのまちを本当にどの方向に持っていきたいのか根本的に考えないと、住み

たいまちナンバーワンにあぐらをかいていると、神楽坂とか色んなまちが追い上げてきています。今は文化人がとどまっています、そこに税金も落ちるでしょうし、潤沢な空気がいろいろあると思うんですけども、私は、これはいつまでも続かないんじゃないかなと思いました。以上、ぜひ考えていただきたいと思います。

○小林 ここでお会いできたのが、個人的にすごく嬉しかったです。ここにいらっしゃる方々が、皆さん同じ意識を持っていらっしゃるんだろうなと思います。私も全く同じことを思っていました。

さっき三宅さんもおっしゃっていましたが、大型商業施設がいけないとは言えないわけです。私も実は、東急百貨店あるいはコピスが出来たときに、たまたま下でアンケートにつかまったので、同じようなことを言ったのです。「本当にここに住んでいる人たちのマーケティングをしたんですか」とか「それに合っている施設とは思えないんだけど」とか「ここで吉祥寺とか武蔵野に住んでいる人が行くのは、せいぜい三浦屋さんでしょうね」みたいな感じで言ったら、コピスの方が「吉祥寺在住の人はみんなそういうふうにお答えになるんですよ」ということをおっしゃるんです。だから、大型商業施設がいけないとは言えないけれども、この人たちのニーズに合っている感じがしないんです。

私自身も、例えばサンロードを昼間に歩いていると、ご高齢の方々が非常に歩きにくそうにしていらっしゃるって、この方たちが何を買いに行くのかなとか、どこでお休みになられるのかなとかいうことをすごく考えてしまったりするんです。そういう意味では、ああ、同じことを考えていらっしゃるんだなと思いました。小川さんはいかがですか。そうは言っても若い人が来なきゃね。

○小川 僕はこの中で一番若造なので、そういう視点から話すと、若い人の間で吉祥寺離れというのは、もう起きている。普通にアンテナを張っている人たちが西荻に飲みに行くのは普通のことだし、吉祥寺というのは人が多いだけで、別に面白い店もないしと、みんな口をそろえて言う。それは恐らく若い人とか年配の人と変わらず同じようなイメージを持っているんだろうなと感じますね。

一方で、何となく文化の香りがするということで、その「何となく」に引きずられて、アンテナを張っている人たちもいっぱい集まってきている。その「何となく」が、結局実は何もなかったとバレちゃったときがすごく怖い。実際、僕は吉祥寺でギャラリーをやっていますけれども、その文化とは何かというところから話すと、またすごく長くなっちゃうかもしれないですけども、そんなに簡単に消費できるものではない。自分から何か考えたり、何か探し求めたり、そこで何

か問題意識を持ったりするものじゃないと、ただのエンターテインメント。ただのエンターテインメントは、吉祥寺は幾らでもあふれていますけれども、もう少し文化的なもの、そこで本当に考え、そこで何かを得る体験ができる場所は非常に少ないという現状があると思いますね。

もしこの 65 周年で「文化」と持ってきているならば、市として考える文化とは何かとかを明確にしない限り、「何となく」という今誰も言えない雰囲気みたいなものは、もういづれなくなっちゃうんだらうなと思います。

○小林 それは私も全く同じことを考えています。美内先生、いかがですか。

○美内 本当にみんな同じような感覚を持って吉祥寺に接しているんだなと改めて思いました。

今、喫茶店にしても、安い立ち飲みに近いコーヒー店がふえて、落ちつける店が本当になくなったんです。その店に入って1時間とか2時間とか、好きな本を読みながら精神を癒せるようなお店が今は皆無です。そういう意味では、とても危機感を持っています。大人が楽しめる場所がないんです。それは、食事をするにしても散歩するにしても、特ににぎやかなサンロードの界限は、土日になると若い人たちがあふれ返っていますので、逆に私は土日は街中には出ないと決めているぐらいです。だから、落ちつきがない感じになってきているのは確かです。

それから、先ほど三浦さんがおっしゃったように、西荻のほうは今、個性的な店がふえています。私も個性的なものを探すとき、お店に入りたいときは、実は西荻のほうにちょこちょこ行っています。西荻もちょっとずつ変わってきたんです。私、千葉に引っ越す前は西荻に2年住んでいたんで、あの界限はよく知っているんです。西荻は古いまま残っているけれども、そこに最近個性が加味されてきて、吉祥寺にとっての危機感ととらえています。吉祥寺は吉祥寺独特の文化を守っていったほうがいいと思う。

それから、これは本当はどうなっているかわかりませんが、週末になるとストリートミュージシャンとか、いろいろ出るんです。一時は、明け方の4時ぐらいに、西友の店の前でダンスしているグループがたくさんいました。私はなぜか真夜中でも平気でうろうろするもんですから、そういう状況によく出くわした。西友の入り口の前のコンクリートのところで、4~5人のグループが一生懸命踊っているわけです。そこを稽古場になっているんです。それから、週末になるとやってくる音楽家たち。自称音楽家かもしれませんが、これから伸びていこうとする若い自由なミュージシャンたちがやってきて、あっちで楽器を鳴らして、こっちで歌っているという光景がよくありました。

と同時に、それを取り締まっている姿もよく見ました。その中では、とてもうまい人たちもいれば、ちょっとこの前を早く通り過ぎたいという歌手さんたちもいる。中で1人だけ、広島か

らやってきている女性のシンガーソングライターがいたのです。彼女の歌声がすごく素敵で、夜、静まりかかったサンロードを歩いていると、アーケードの下にとても素敵な歌声が響いてくる。何だろうと思って行くと、元三浦屋、今、靴屋さんになっているお店のシャッターを閉めたところで歌っている女の子がいた。彼女は、東京のライブハウスで歌うときは必ず吉祥寺に立ち寄って、自分で歌を歌い、CDを売っていたのです。余りに素敵だからと思って聞いていたら、どんどんファンがついてきて、若い男の人、中年の男の人にもよく聞くようになったのです。

私とその彼女を時たま見るようになって、あるとき行ったら警官が取り締まっていたのです。「ここに住所を書け」とか「もう二度と来るな」とか。だけど、何カ月か置いてから、性懲りもなく、また出るようになったのです。つまり、彼女にファンがいるからです。ところが、また警察が取り締まって、それっきり彼女の姿を見なくなりました。

同じように吉祥寺で音楽を聞いてもらいたいという人もいっぱいいるので、私の提案なんですけれども、そのストリートミュージシャンたちを集めた何か大きな広場みたいなものがないか。月に1回自由にやってもらうとか、そこから逆にアーティストを育てていけるような環境ができれば面白いんじゃないかなと思っているのです。それは今、吉祥寺の魅力がまだあるうちにやらないといけないんじゃないかなと思ったりします。

○小林 その歌声は私も聞いたことがあります。三浦さん、いかがですか。

○三浦 先ほどの私の辛口の意見をきっかけに、皆さん、辛口の発言をし始めた。(笑)

○美内 みんな心で思っていたことです。

○三浦 ちょっと甘い話もしなきゃなと思ったりするわけですが、住みたいまちナンバーワンというのは、裏を返すと、住めないまちナンバーワンなんです。住んでいないから住みたいのです。住んでいないから、住んでよかったまちにはならないということ。さっきの井形さんのお話のように、500万円のメゾネットがあるのかということ言えば、実はあるのだと思うんです。

住みたいまちナンバーワンで、イメージとして、もちろん実態としても非常に大きなまちになってしまったのだけれども、さっきの子どもたちの歌の中にもあったように、吉祥寺は本来、小さいまちなんです。小さな、すごく個性的な、落ちつきのある文化的なまちだった。それが余りにも良かったので、色んなものが集まってきちゃって、大きくなった。このまま大きくなり続けることは、立川もあつたり国分寺もあつたりするのであり得ない。人口も減ってきます。そうすると、小さなまちに、いい形でどう戻していくかを考えないといけない時代だろう。それは吉祥寺の駅の周りだけ小さくまとめていくのかということもあるんだけど、ジャストアイデアの無責任な提案をすると、例えばムーバス、土屋さんは帰っちゃったけれども、土屋さん最大の

功績の1つであるムーバスが、ネットワーク化されたでしょう。あの停留所の前に店をつくったらどうですかね。

私の住んでいる東町のお米屋さんも今月いっぱいではなくなるんだけど、家の近くのお店はどんどんなくなっている。そうすると、駅前まで行くか、コンビニに頼るしかなくなるけれども、やっぱり住宅地の中にちょっとした店が欲しかったりする。生活必需品だけでなく、カフェであれ雑貨屋であっても、ちょっと欲しいと思うんです。いってみれば、ムーバスの停留所ごとにお店があり、ムーバスを使えばそのお店を回れる、こんなまちづくりがあってもいい。外から来る人は駅前で頑張ってお買い物をして、住んでいる人はムーバスで買い物をする。僕は自転車生活者なので、もっと自転車であまく回れるようにしてほしいとか、今までの発展の図式とは違う形で、歩くとか、せっかくのムーバスを使う。武蔵野市、特に吉祥寺は30代の若者が1回3000円使うまちになっちゃったと思うんです。高齢化している住民、それから子育ての人たち、もちろん子どもたちの視点が非常に足りなかった。これからはここが重要になってくる。

今日は文化が都市をつくるかというテーマですけども、それは同時に、福祉とか環境とか、もちろん商業、経済あるいは教育とかを含めた横串の政策を打っていかないといけない時代になる。武蔵野市は、日本の中でも最も優秀な自治体だと思いますので、ぜひそういう横串の政策を考えていくことによって、次の未来を考えていていただきたいと思います。

〇三宅 商業の話は商業者がやっていくということでもいいのかな。私は吉祥寺のまちに一日突っ立っているんですが、今一番気になっていることは、ベビーカーを押したお母さん。気になってしょうがない。35年ほどベビーカーを押したことがなかったんですが、今、孫が7歳から1歳半まで6人ゴチャツといて、この5年間ぐらいつとベビーカーを押して吉祥寺のまちを歩くんです。ベビーカーで電車に乗る、まちに出る、おしめを取りかえる……、まちとしてまだまだ足りないのかな。

ベビーカーを押すお母さんが物すごく多いんですよ。2人とか3人を大切に連れてきているお母さんを見ると、感激して、嬉しくなっちゃうんです。だけど、全体としてそういう子どもたちを取り巻く色々な施設がまだまだ足りないのかな。自分の店でも何ができるのかとか、まちとして何ができるか。歩道でベビーカーを押して文化会館から吉祥寺までたどり着けるだろうかとか。もちろんこれは車椅子なんかに該当するんですけども、自分が体験しないとなかなかわからない。私は三十数年間ベビーカーを押していませんでしたので、忘れていました。ここ5〜6年、ベビーカーを押したら、ベビーカーは不便だ。お母さん方がベビーカーを押しているのを見ると、すごくうれしいんです。少子化、少子化と言うけれども、子どもがたくさんいるじゃないか。こ

れをもっと目に見える支援をしていかないと、武蔵野も日本もだめになってしまう。

施策の中では、いろいろご支援をいただいているはずなんですけれども、住んでいる人だけじゃなくて、外来の人たち、商業者としても、こういうベビーカーを押しているお母さん方に支援する方法をやって、反対に、住みたいまち、来てもらいたいまち、住んでよかった武蔵野というまちにしたいというふうに、ベビーカーを押しながらここ数年考えています。私に実現することはできませんけれども、ぜひともよろしくお願いを致します。

○小林 今、ある人の方向を見てお願いをされていましたが、少し明るく終わりたいと思いますので、最後に一言ずつ、期待を込めてお話しをいただければと思います。

私は、個人的には子どもたちとか、それこそベビーカーを押して普通に歩けるまちもそうですし、自分に高齢の父親がいるからということもありますけれども、そういう意味では、ここで本当に文化的な経験をしながら生きていけるような何かをもう一回確認をしたい。

私の専門の世界からいうと、文化でまちづくりをしたり、文化を振興していくみたいなきに、結構重要なジレンマになる要素がある。その1つが、外から一生懸命人を呼ぶために文化を使うやり方と、そこに住んでいる人たちが文化で豊かになることを両立させるのはすごく難しいと言われるんです。だけど、それをバランス良くとっていくところが、市だったり行政、またはそこに住んでいる市民の人たちだったりするんだと思うんです。

例えば商業の話は商工会の人たちや何かが中心になってやるものなんだろうけれども、まち全体で考えたらちょっと行き過ぎなんじゃないのみたいなこととか、住んでいる人たちはこう思っているよみたいなことが言いやすかったり、あるいはそういうことを考えてちょっと話せるような場があるだけでも随分違うのかなということもちょっと思ったりしています。そんなことを含めて、残り5分ですので、1分ずつでお願いします。

○井形 私は、吉祥寺らしさをとどめるには、吉祥寺トラストみたいなものをつくったらいのではないかと前にご提案しました。吉祥寺は商業文化が非常に発達しているので、一定年数、30年以上続いたお店に、イギリスで言えばロンドンのブループラークみたいな、ここはずっと続いている店ですよ、そういう公的な認証だけでも与えていくことによって、外から来た人もそのお店を認識し、まちの人たちも買い支え、小さなお店が廃れない、そういうことをぜひいつかやりたいと思っております。

○小川 イベントにぜひ来てくれたら……。 (笑) 吉祥寺で何となく文化ではなくて、実際に現在進行形で、皆さん言っていましたけれども井の頭公園のある三鷹市で今これをやっていて、ほかにも文化的なものを自分でアンテナを張って自分で見つけようとすれば街中で出会えたりする

ので、「何となく武蔵野は文化の香りがする」ではなくて、もう少し積極的に、具体的に、文化に触れるみたいなことを1人1人がやるチャンスもたくさんあるし、そういうのをもっと楽しめればいいのかと思います。

○美内 私は、先ほどもちょっと言いましたけれども、色んな若いアーティストたちが集まり、アーティストたちを育てられるような場所。劇場、シアターを含めて実はたくさんあると先ほど市長さんからお聞きしたのですけれども、私自身が認識しているのは3つか4つしかないんです。それらをもっと活用して、お芝居をやられる方とかをもっとまちぐるみで応援するような色んなシステムができればいいなと思っています。そうすると、それこそ本当にまちぐるみで文化を育てる形になってくるんじゃないかなと思うんです。お芝居もそうだし、音楽もそうだし、その中から小さなオペラが出てもいい。とにかく吉祥寺の、こういう店あるいはこういう劇場で、こういうことをやったよということが、そのアーティストたちのステータスになれる、そんな文化をまちぐるみで育てるようなことができれば本当にいいんじゃないかなと思っています。

○三浦 私は先ほど言ったとおりですけれども、文化政策と都市政策と経済産業政策と福祉政策が横串で展開されるべきだろうと思っていて、具体的には車椅子に乗っても、この文化会館に簡単に来れるとかね。三宅さんがベビーカーを35年ぶりというお話をされて大変うれしかったのですが、私も10年ちょっと前ぐらいまではベビーカーを押しておりました。ベビーカーを押すと、井の頭通りの歩道は歩きにくいです。傾いちゃって子どもが転びそう。女子大通りなんかもそうです。ベビーカーなんてとても押せません。

そういうふうに、文化を楽しもうと思っても、いっぱいバリアがあるわけです。そういうバリアを外していくことによって、市民も他の地域から来た人も、もっと武蔵野市の資源として持っている文化、それからさっきも言った自然も含めた大きな意味での文化を享受できるようになるのではないかと思います。

○三宅 私は、吉祥寺に限定されちゃうんですけれども、吉祥寺で商業をやっていてよかった、武蔵野に住んでとてもよかったとずっと思っています。

吉祥寺には、商業のビッグチャンスが幾つも転がってしまっていて、新しい起業をし、すさまじい勢いで大きくしている若い人もたくさんいます。チャンスがたくさん転がっています。吉祥寺はそういう土壌にありますので、これからも若い人がどんどん挑戦してくれることをすごく期待しています。私はもう歳ですので、若い人に期待するところがすごく大きいんです。これからもよろしくお願いします。

○小林 皆さん、時間を守っていただいて、ぴったりという感じなんですけれども、皆さん、武

蔵野市が好きで、吉祥寺が好きでという思いから、甘口と辛口両方でお話しいただいたと思います。

私も個人的には若い人が挑戦をして、それを続けていけるまちがいいなと思いますし、高齢者、弱者という言い方が適切かわからないですけれども、車椅子もベビーカーの人たちも暮らしやすい、普通の、当たり前なまちもちゃんとキープしてほしいという思いを持っています。

ただ、今のお話の中ですごくそうそうと思ったのは、美内さんがおっしゃったこと。地方に行くと、自分のまちにサッカーチームがあるとか、まちぐるみになって応援するとかいうのがありますね。武蔵野市もそういうのがあって、武蔵野市とか吉祥寺は、みんなで若い人の頑張る姿とか、若い人でなくて高齢者でもいいんだけど、頑張っていることを応援して支え合う風土みたいなのが何となくあって、やっぱりここに住んでよかったねとか、「ここがふるさとなんです」と言ってもらえたりするまちになってほしいなと思います。

皆さん、今日はありがとうございました。皆さんに拍手をお願いします。(拍手)